

English Wind

小学校全教職員及び

中学校英語科担当教員配付

英語教育の



1 新学習指導要領を見据えて パフォーマンステスト(又は評価:以下便宜的にテストとする)を検討しよう!

新学習指導要領における3観点の評価の方法は、概して以下のとおりまとめることができます。

(※以下は、令和元年11月現在の情報に基づいて記載しています。)

●「知識・技能」の評価について

「知識・技能」の評価は、「習得」状況だけでなく、「活用」させる中での評価も大切!

「知識・技能」の評価は、各教科等における学習の過程を通じた知識及び技能の習得状況について評価を行うとともに、それらを既有的知識及び技能と関連付けたり活用したりする中で、他の学習や生活の場面でも活用できる程度概念等を理解したり、技能を習得したりしているかについて評価するものである。❗️【チェック】具体的な評価方法としては、ペーパーテストにおいて、事実的な知識の習得を問う問題と、知識の概念的な理解を問う問題とのバランスに配慮するなどの工夫改善を図るとともに、例えば、児童生徒が文章による説明をしたり、各教科等の内容の特質に応じて、観察・実験をしたり、式やグラフで表現したりするなど、実際に知識や技能を用いる場面を設けるなど、多様な方法を適切に取り入れていくことが考えられる。

「事実的な知識の習得を問う問題」と「知識の概念的な理解を問う問題」のバランスに配慮!

●パフォーマンステストの活用を検討

●「思考・判断・表現」の評価について

「思考・判断・表現」の評価は、各教科等の知識及び技能を活用して課題を解決する等のために必要な思考力、判断力、表現力等を身に付けているかどうかを評価するものである。❗️【チェック】具体的な評価方法としては、ペーパーテストのみならず、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作や表現等の多様な活動を取り入れたり、それらを集めたポートフォリオを活用したりするなど評価方法を工夫することが考えられる。

●パフォーマンステストの活用を検討

継続的に資料等を蓄積しポートフォリオも活用!

●「主体的に学習に取り組む態度」の評価について

本観点に基づく評価としては、「主体的に学習に取り組む態度」に係る各教科等の評価の観点の趣旨に照らし、① 知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行うとする側面と、② ①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面、という二つの側面を評価することが求められる。

2つの側面は、相互に関わり合いながら立ち現れることに留意!

これら①②の姿は実際の教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるものと考えられることから、実際の評価の場面においては、双方の側面を一体的に見取することも想定される。例えば、自らの学習を全く調整しようとせず粘り強く取り組み続ける姿や、粘り強さが全くない中で自らの学習を調整する姿は一般的ではない。

●パフォーマンステストの活用を検討

❗️【チェック】具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。その際、各教科等の特質に応じて、児童生徒の発達の段階や一人一人の個性を十分に考慮しながら、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で、評価を行う必要がある。したがって、例えば、ノートにおける特定の記述などを取り出して、他の観点から切り離して「主体的に学習に取り組む態度」として評価することは適切ではないことに留意する必要がある。

他の観点から切り離して評価することは適切ではない!

参考及び抜粋)「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」平成31年1月21日/中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会

このように、新学習指導要領における学習評価では、定期テスト及び単元テストなどのいわゆる「ペーパーテスト」だけではなく、児童生徒に実際に英語で会話をさせるなどの評価方法が求められています。そこで、「パフォーマンステスト(小学校ではパフォーマンスクイズの場合あり)」が目されるのです。なお、詳細は、令和元年度中に国立教育政策研究所から配布予定の『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料を参照するようにしてください。

- 今年度の様々な授業公開や研修会において「パフォーマンステストについて、もっと知りたい」という声を耳にすることが多くなってきました。中学校だけではなく、小学校においても、次年度の新学習指導要領の全面実施に向けて、パフォーマンステストの実践に取り組んでいる学校も少しずつ増えてきているようです。ふくしま外国語教育推進リーダーの先生方も、積極的にパフォーマンステストに取り組んでいます。
- 全国的には、以下のような状況が報告されています。先生方の小中学校では、どのような実施状況でしょうか。（平成30年度英語教育実施状況調査（文部科学省HP掲載データから））

パフォーマンステスト（全国：中学校）スピーキング・ライティング「両方やっている」
1年 81.1% (7,600校/9,374校) 2年 84.4% (7,916校/9,374校) 3年 84.3% (7,906校/9,374校)

全国的には、80%以上の中学校の各学年で、「話すこと」と「書くこと」の『両方』に取り組んでいることが読み取れます。なお、パフォーマンステストは、話すことだけではありません。調査にもあるとおり、「書くこと」についても実施可能、さらに「聞くこと」及び「読むこと」でも、もちろん実施可能です。

- 福島県でも、特に中学校では、多くの先生方がパフォーマンステストに取り組んでいます（平成30年度の中学校英語に関する研修会では、1人一台タブレット端末などを用いてパフォーマンステストの演習を実施：タブレット端末なしでも全く問題ありません）ので、小学校の先生方は、同じ学区の英語教育のプロである中学校の先生方から実践的なアドバイスを得られると思います。平成30年度の英語教育実施状況調査でも、ご存知のとおり、小中連携が英語力向上の鍵である旨が明らかになっています。小中連携の一環として、パフォーマンステストの共通実践などを推進してみるのはいかがでしょうか。
- 以下、参考までに、最近の研修会等で耳にする意見を整理しました。

パフォーマンステストに取り組んでいますか？



【チェック】

中学校では、学期に1回程度、実施する場合があります。中学校を参考にして、小学校でも、徐々に広がっています。

- 学期に1回ぐらいは、パフォーマンステストをやっています。（中学校）
- 2～3単元が終わったら、その内容のまとまりについてパフォーマンステストをやります。（中学校）
- 今年度、学区の中学校の先生にアドバイスをいただき、パフォーマンステストを始めました。（小学校）

●積極的な小中連携が始まっています！

パフォーマンステストを実施するコツは何ですか？



【チェック】

A L Tの活用はもちろん、評価方法の事前準備と児童生徒への事前説明が大切です。「話すこと」の場合は動画での記録も1つの方法ですね。

- A L Tの先生が常駐しているので、自分は学級で別の指導をしながら、生徒1人1人を別室で、A L T対生徒の形式でスピーキングをしています。（小学校）
- 小学校では授業時数が限られているし、A L Tが毎日来るわけではないので、A L Tが来校する時に集中して実施しています。（小学校）
- 特に小学校では、パフォーマンステスト（パフォーマンスクイズ）を実施して、児童が「やった！」「できた！」「またがんばりたい！」と、今後の学習意欲につながるように、位置付けることが重要です。（小学校）
- 評価規準を明確にすること、事前に生徒にその評価規準を伝えること、A L Tが参加する場合はその評価規準の共通理解を図ることなどが大切です。（中学校）
●児童生徒が達成できるような、事前の授業づくりを！
●ルーブリック等を活用する先生も！
- 言語活動する場面をビデオやタブレットで録画して、後で評価することもできます。A L Tや自分がその場で評価する場合でも、記録用に録画しておいて、評価の確認をすることもあります。（中学校）

- このように、県内でも様々な実践が広がっています。今年度の全国学力・学習状況調査の「話すこと」調査が参考になることはもちろんですが、県教育センターの今までの研究の中にもパフォーマンステストに関するものが見られ目を通しておきたいものです。新学習指導要領の全面実施を踏まえて、是非、今からパフォーマンステストに関して検討するなど、準備を進めていきましょう。（次号では、パフォーマンステストの具体を考えます）